

都の雪

馬鹿...馬鹿...

殺しまえ、ぐさりと
常緑樹の枝をたわませる雪も
その雪をゆらゆら揺する北風も

透明な光の中にぱっと広がる氷の花粉は

俺の^{うつろ}空虚な熱情を鍛えるべく

堅い^{はくや}白野にしかれたレールに沿って

隠れ里へと俺を運ぼうとする

俺の手で殺してやろう
殺してしまえば、俺は
俺は、春の哀しみに向かって
やっぱり唾を吐くだろう

ああ

愛すべき冬め

俺の手で殺^やってやろう

一思いに

(1982.1.29)